

## 第4話：ぽーちゃんのノック

昼下がりに、何かが軋んだ。

ぽーちゃんが、突如アビイちゃんに飛びかかった。

その瞬間、私は反射的に大声をあげてしまった。

空気が凍りついた。アビイちゃんは身を縮め、ビオラちゃんは遠巻きに見ている。

私は入れかけのコーヒーを手に、一室にこもることにした。

沈黙のなかで、私は仕事に逃げた。

しばらくして、ぽーちゃんの鳴き声が聞こえてきた。

それは、甘え声のノックだった。

一度、また一度。

そして、ついに私は根負けしてドアを開けた。

そこには三匹が並んでいた。

ぽーちゃんを飛び越えて真っ先に部屋に飛び込んできたのは、意外にもアビイちゃん。

そのあとをぽーちゃん、そしてビオラちゃんが続いた。

私は静かに呟いた。

「お母さんも悪かった。遊んで欲しかったんやね。ごめんね。」

ぽーちゃんは、自分のケージの上に登って、眠り始めた。

なでなでして去ろうとすると、ぽーちゃんはもっと、と手を伸ばした。

私は思った。

——いつもぽーちゃんには、我慢させてたのかもしれない。

ぽーちゃんは、生後3か月でわが家にやってきた。

まだ小さな体で、半年ものあいだ、独りでお留守番をがんばってくれた。

当時、私は正規の教職に就いていて、朝から夕方まで家を空ける生活だった。

そのあいだ、ぽーちゃんは静かに待ち、帰宅すると、必ず私の足元に寄り添ってくれた。

そんな日々のなかで、私たちは少しずつ家の空間を「ふたりの居場所」に変えて

いった。

この家には、私の母が認知症で施設に入所してから、掃除が行き届かずに放置されていた部屋がいくつもあった。

埃と沈黙に包まれていたその部屋たちは、ぽーちゃんにとっては立ち入り禁止の領域。

けれど私は、ぽーちゃんと過ごす毎日の中で、ひとつ、またひとつと、その扉を開け、掃除し、明るい空気を入れていった。

ぽーちゃんは、静かに見守ってくれていた。

ときには怖がりながらも、好奇心をもって新しい空間に足を踏み入れ、私と一緒にその部屋に「生きた時間」を吹き込んでくれた。

そうして作られてきた私たちの暮らしは、ただの生活ではなく、癒しと回復の道のりだった。

この家の空気が少しずつやわらかくなっていったのは、間違いなくぽーちゃんのおかげだ。

そんなぽーちゃんを、今日は叱りつけてしまった。

コーヒーは苦い。

ぽーちゃんは、生後3か月でわが家にやってきた。

まだ小さな体で、半年ものあいだ、独りでお留守番をがんばってくれた。

当時、私は正規の教職に就いていて、朝から夕方まで家を空ける生活だった。

そのあいだ、ぽーちゃんは静かに待ち、帰宅すると、必ず私の足元に寄り添ってくれた。

そんな日々のなかで、私たちは少しずつ家の空間を「ふたりの居場所」に変えていった。

この家には、私の母が認知症で施設に入所してから、掃除が行き届かずに放置されていた部屋がいくつもあった。

埃と沈黙に包まれていたその部屋たちは、ぽーちゃんにとっては立ち入り禁止の領域。

けれど私は、ぽーちゃんと過ごす毎日の中で、ひとつ、またひとつと、その扉を開け、掃除し、明るい空気を入れていった。

ぽーちゃんは、静かに見守ってくれていた。

ときには怖がりながらも、好奇心をもって新しい空間に足を踏み入れ、私と一緒にその部屋に「生きた時間」を吹き込んでくれた。

そうして作られてきた私たちの暮らしは、ただの生活ではなく、癒しと回復の道のりだった。

この家の空気が少しずつやわらかくなっていったのは、間違いなくぽーちゃんのおかげだ。

そんなぽーちゃんを、今日は吐りつけてしまった。コーヒーは苦い。

小さなぽーちゃんは、夕方になるとカーテンの前に出て、いつも私の帰りを待っていてくれた。

カーテン越しの西日を浴びながら、ただじっと、音もなく。

私が体調を崩して寝込んでいるときも、ぽーちゃんは枕元にそっと寄り添ってくれた。何をすることもなく、ただそこにいてくれる、その静かな優しさに、私は何度も救われた。

そのくせ、だっこは嫌いで、すぐに手の間をすり抜けていく。

逃げ足が速くて、ちょっと怖がり。

今でも、爪切りだけは絶対に「ごめんです」。断固拒否の構えを見せる姿も、またぽーちゃんらしい。

そんなぽーちゃんを、今日は吐りつけてしまった。コーヒーは苦い。